

「デジタルコンテンツ EXPO 2017」

神谷 直亮

デジタルコンテンツ協会が主催した「デジタルコンテンツ EXPO 2017」が、10月27日から29日まで日本科学未来館(東京・江東区)で開催された。第10回を迎えた今年の会場は、「コンテンツ・テクノロジー・ショーケース」「Innovative テクノロジー・プラス」「Future Experience」「ガジェット Japan」「シンポジウム・ステージ」から構成されていた。遅ればせながら展示会の概要をレポートする。

「コンテンツ・テクノロジー・ショーケース」のコーナーには、ソリッドレイ研究所、ハシラス、ディヴァース (DVERSE)、大日本印刷、凸版印刷、TAAGなどが出展した。ソリッドレイ研究所は、「バーチャル空中ブランコ」をブースに設営して、同社のVR(仮想現実)システム「デュオサイト」を使った「岐阜市信長公450プロジェクトバージョン」の試遊を促していた。実際に試遊させてもらったら、450年前の戦国城下町・岐阜の上を飛翔しながらお城の雄大さや街並みを堪能できた。このコンテンツは、岐阜市で開催中の「信長公ギャラリー」で実際に提供されているもので大人気のこととであった。なお、ヘッドマウントディスプレイではなく、フランスのイトリブル

シャット社製の「E3S」メガネをかけて試遊する方式を取っており、2台のプロジェクター、3台のセンサー、「E3S」メガネでシステムを構成していた。

ハシラス社は、昨年「オムニジャンプVR」のデモで注目を集めたが、今年は、「乗馬VRゲーム」で人気を呼んだ。つまりトランポリンをやりながら一人でVR空間を楽しむという趣向から、3人が4人で馬上ゲームを競うというグループ思考に転換を図っていた。予約申し込みの若者が多く、筆者には試遊のチャンスが回ってこなかったが、説明員によれば、「HTC社のVIVEヘッドマウントディスプレイとハンドトラッキングシステムを使用している。馬上という不安定な姿勢で、いくつのターゲットを射ることができるかが勝負」とのこととであった。

ディヴァース社は、同社が建築業者や不動産販売業者向けに開発したVRツール「SYMMETRY alpha」と、ドイツのゼンハイザーが昨年の「InterBEE2016」で公開した「AMBEO VR MIC (360度空間音声マイク)」を組み合わせた興味深いデモを実施した。言わば、VR映像と4チャンネルの立体オーディオによる空間再現シミュレーションで、体験希望者が長蛇の列を

した」と説明していた。

大日本印刷は、VRとAR(拡張現実)を活用する体感型デジタルショールームを設営し、来場者に体験の場を提供していた。ショールームを訪れる顧客に、実態と遜色のないビジュアルな利用シーンを体感してもらい購入を後押しするのが狙いである。ブースでは、「VRとARに加えて、MR(複合現実)の様々なデバイスと2D/3D映像を組み合わせる活用法も考えている」との説明が行われていた。

凸版印刷は、ブースにドーム型のVRコミュニケーションスペースを設営して「ヘッドマウントディスプレイを使わずに複数の人が肩を寄せ合って映像を楽しめる」とPRに余念がなかった。ドームのサイズは、高さ2.4m、幅2.6mで、素材は、防災段ボールパネル製である。上映されたコンテンツは、講談社VRラボが制作したVR空間にアイドルが出演する「HotStepSing! 3D Live」で、非常に臨場感にあふれていた。

TAAGは、一風変わった「風神雷神」のデモを実施して意表を突いた。風の音を再現する楽器「ウインドマシン(風音器)」の動作に連動して、映像がリアルタイムに動き回るインタラクティブコンテンツのデモである。実際に来場者が風音器を操作し、楽しみながら風神と雷神を風に乗せて動かすという趣向を凝らしており、会場で少し息抜きができるブースになっていた。

珍しかったのは、タイのデジタル社会省がスポンサーになって開発されたという2件のVRのデモを同国の出張者が行っていた。1件は、EXZY VR LAB製の「VR SPHERE」である。名称の通り球体の透明な乗り物の中に入り、ハンドコントローラーを自由に操作しながらVRの旅を楽しむことができる。もう1件は、3Dスキャンテクノロジーで集めた情報をVRで細かい部分まで見られるようにした「タイ重要文化財バーチャルツアー」の鑑賞体験デモであった。この没入型の凝ったコンテンツは、

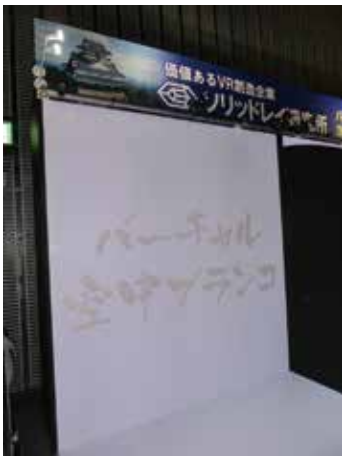


写真1 ソリッドレイ研究所は、「バーチャル空中ブランコ」をブースに設営して、同社のVRシステム「デュオサイト」を使ったデモを繰り返し広げた。



写真2 ハシラス社は、HTC社のVIVEヘッドマウントディスプレイとハンドトラッキングシステムを駆使する「乗馬VRゲーム」で人気を呼んだ。



写真3 ディヴァース社は、「SYMMETRY alpha」と「AMBEO VR MIC」を組み合わせた興味深いデモを実施した。

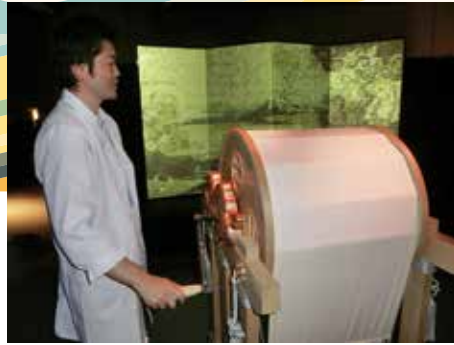


写真4 TAAGは、風音器を使ってインタラクティブコンテンツ「風神雷神」の動き回る様子を楽しめるという一風変わったデモを行っていた。



写真5 タイのEXZY VR LABは、同社が開発した「VR SPHERE」を出展して来場者に試遊を促していた。

Thammasat 大学の Rangsit キャンパスが制作したという。

「Innovative テクニク・プラス」のコーナーには、ドワンゴ、東映ツークン研究所、エージーエー (AZA) などが出展していた。

ドワンゴ社は、同社の先端技術チームが開発した同期システム「DAHLES」とAR演出技術を駆使して超歌舞伎「花街詞鏡」の演目の一部を、実際に舞台の前で見ているかのような臨場感で再現して見せていた。よく見ると今年4月に「ニコニコ超会議2017」で試みた初音ミクの舞姿を、マイクロソフトのホロレンズを装着することで立体的に鑑賞できる仕組みに創り上げたものである。説明員によれば、「生放送で動画サービスを提供するニコニコの狙いは、同じイベントをライブで見る観客同士の感情の共有や、オンラインとオフライン双方の一体感をライブ技術で演出して見せることにある。今回の試みは、そのさわりを体験してもらおうもの」という。

東映ツークン研究所は、バーチャルプロダクションのために開発したというマーカースのリアルタイムカメラトラッキング&合成システムをデモした。ブースの担当者は、「マーカースが不要なので準備の手間が減らせる。セットの空間情報を記憶できるので、CGの位置をカットごとに合わせる手間が省ける。とにかく素早くかつ簡便に撮影が始められるのがメリット」と強調していた。

エージーエーは、現実と仮想現実を空間中にマッピングする新しい映像体験を促していた。つまり、プロジェクションマッピングとVR/ARを融合させるウルトラマッ

ピング技術がウリである。ブースでは、「ネットワークシステムを用いてすべてのデバイスの映像再生を一括制御できるのと、マッピングされているオブジェクトに疑似的に触る体験ができるのが特色」と説明していた。

「Future Experience」の目玉は、NHKメディアテクノロジーとNHKエンタプライズが共催した「8K:VRライド」と、ヤマハの「みらいのアンサンブル」であった。

「8K:VRライド」は、サザンオールスターズの楽曲「東京 VICTORY」を聴きながら、用意された遊動式座席で東京タワー、雷門、アメ横、渋谷の交差点などの映像を8Kかつ没入感の高いVRで楽しむという趣向を凝らしたイベントである。しかし、遊動式特等席に試乗が可能な人数は、一回につき2名だけでなかなか順番が回ってこないのが難点と言えた。試乗できない入場者は、立ち見を要求されるのだが、この立ち見席からは、肝心な映像が湾曲して見えてしまう有様であった。この仮設して運用できる「WV Sphere 5.2」システムは、ワンダー・ビジョン・テクノ・ラボラトリー (WV)、コチョコ・ラボ、NHKメディアテクノロジー、NHKエンタプライズの共同開発で、8K単プロジェクターによる球面照射システム、超広視野角ドーム型ワイドスクリーン(幅

5.2m、高さ3.4m、奥行き2.6m)、電動6軸モーションベース構成されている。ヘッドマウントディスプレイを使わずに5.1チャンネルサラウンド音響を楽しめるのも特色と言える。

「みらいのアンサンブル」では、紅い流星、今村耀、よみいの3名の演奏に人工知能合奏システムが追従しハーモニーを奏でることであったが、時間がなく視聴できなかった。

「ガジェットJapan」のコーナーは、その名称の通りユニークなデバイスやソフトを一堂に集めていた。中でも目に付いたのは、読む能力を拡張するスマートグラス(出展者、OTON GLASS)、VR生け花(出展者、ヒューマンインタラクティブテクノロジー)、テレイグジスタンス・ロボット(出展者、海馬)であった。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト

SWE DISH

ニッサン新エルグランド4WD
5名定員
1.2m径・自動捕捉アンテナ搭載
車高2.2m以下(地下駐車場可)
3.6 KVA NMG アイドリング運用
水圧エコ・ボール4m 搭載
強化サスペンション
国内(100V)海外(240V)対応
IPコントロール
ハイビジョン映像伝送
運転席からワンマンオペレーション

SMART SNG
HD TV, 3D TV and IP OVER SATELLITE ECO OPERATION

スマート・サテライト・ニュース・ギャザリング

<http://www.bizsat.jp>

設計・製造・衛星通信のことなら
エーティコミュニケーションズ株式会社
TEL: 03-5772-9125

A Communications k.k.